

体験談

派遣先

タイ

## タイ・サンガ安居について

第一回生 田中 智誠

(黄檗宗大本山萬福寺文華殿主管・滋賀県正瑞寺住職)

筆者は明末清初の宗教思想と中国臨濟宗と日本黄檗宗についての調査研究誌『黄檗文華』を編集し、年二回宝物館展示室「文華殿」で特別展を企画しています。現在、シンガポール国立アジア文明博物館での建国50周年記念展（二〇一六年十一月三日～二〇一七年二月十九日）に出陳中で、二月二十七日よりクーリエとして返却手続きに行ってきました。また日泰修好130年記念展が九州国立博物館（四月十一日～六月四日）と、東京国立博物館（七月四日～八月二十七日）で開催されます。黄檗山の伽藍はシヤム産チーク材で造立されており、関係文書資料とタイ皇室下賜の銀製香炉などを出陳します。帰路、タイの国立博物館を監督するタイ王国文化省美術局と国立図書館、ワット・パクナム寺院などを訪問します。

タイ・サンガ最長老ソムデットのパクナム寺住職に15年ぶりに拝謁し、国立図書館では33年前に明治期日泰仏教交流史に関する資料を調査したものを再調査します。

ワット・パクナムは、中興比丘により発展した寺院で、托鉢の困難から、齋堂（食堂）で供養を受けて学行に専念できる制度を採り入れ、全国から多くの沙弥が修行し、短期出家の新比丘、また女性のメーチも多い寺として知られています。

昭和60年頃に、文化人類学者青木保氏によるタイ仏教体験記が出版され、その分野の注目があつまり、NHKの「おしん」、「一休さん」などがバンコクでも有名で、サマネーン（沙弥）にとつてはボクシングが人気がありました。その頃の日本では社会を驚愕させるような事件や事故もありました。

禅宗専門道場での叢林生活との共通する要素もありました。新比丘となるためには、師僧（アチャー）となる僧との師弟関係を結び、施主、介添え役などが必要です。得度式の日取り、パーリー語僧名の選定です。特に得度式での問答手順を暗記することが（羯磨・教授・尊証・引請などの）、一番の難関と試練になっています。

月（日）分行事としては、早晩朝暮のおつとめと粥飯（朝と昼の食事）、制中（雨安居）では教理他の学課講義、サマーデイ（静坐黙想法）、解制後の練かえし接心とも言わべき林間での遊行に出るものもあります。

新・満月日の布薩（ワン・プラ）、その前日（晦日、ワン・コン）は把鍼灸治に相当する、

毎日夕刻に二人でもって戒律に違反していないか懺悔することなどです。

佛教協会による法会に参列し誦経と受食供養があつたり、近親者・還俗者などによる施食供養によられたりで、これらは、「徳の獲得行為」タン・ブンと呼ばれています。

以上の事は相手の懐に飛び込んで初めて体得できる行履かんりではないでしょうか。

当時世界仏教徒会議名誉事務局長の小谷亀太郎夫妻、ダーヤカ役（施主）のアカポン家の皆様、住職と副住職、ピッチャイ師、日本人納骨堂主木村師、同期の梅田師、中尾医学師、五十嵐氏、ヴィトウーン氏、バンクコク国立図書館等多くの皆様にお世話になりました。とりわけ横浜善光寺留学僧育英会を立ち上げられた黒田武志理事長の誓願が無ければ、現在の筆者の存在もありません。関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

合掌九拜

平成二十九年二月四日



(上) 得度式にて (アカボン家・小谷夫妻)  
(下) 明治 44 年頃、ラーマV戴冠式記念贈呈



(上) 住職より得度を受ける  
(下) ワット・バクナム寺院

